【310】

氏　名(本　籍)	若本啓子(わかもとけいこ)(山口県)
学位の種類	博　士(理　学)
学位記番号	博乙第 1,397 号
学位授与年月日	平成10年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	地球科学研究科
学位論文題目	Regional Characteristics of the Feed-Supply Basis of Dairy and Beef Cattle Raising in Iwate Prefecture, Japan (岩手県における乳用牛および肉用牛飼養の飼料基盤の地域的特性)

主　査	筑波大学教授	理学博士	高橋伸夫
副　査	筑波大学教授	理学博士	佐々木　博
副　査	筑波大学教授	理学博士	斎藤　功
副　査	筑波大学教授	理学博士	田林　明
副　査	筑波大学助教授	理学博士	手塚　章

論文の内容の要旨

本研究の目的は，岩手県を事例に，牛飼養の地域分化と飼料基盤との関係を考察することにより，牛飼養の地域的差異をもたらした飼料基盤の特性を明らかにすることである。わが国では1960年代以降に，高密度な牛飼養地域の縮小および大都市圏からの離心化傾向が顕著となった。牛飼養地域は大都市圏周辺部から遠隔地域にかけて分散的に残り，異なる種類の牛飼養にそれぞれ特化した。本研究は，かかる牛飼養の地域分化を形成する要因として，飼料基盤に注目した。飼料基盤とは，畜産経営が利用する全飼料の供給源および供給産業部門を意味する。それは，飼料畑，水田，野草地などの粗飼料生産基盤と，配合飼料工場，製粉・製油工場，飼料卸売商などの流通飼料供給基盤とから構成される。

本研究は，まず統計分析に基づき，1990年代初頭の東北・関東地方における牛飼養の地域分化と，飼料基盤の地域的差異を明示した。牛飼養密度の高い411市町村は，乳用牛と肉用牛の飼養密度の対平均値，および特化する肉用牛飼養型に基づき，粗放的牛飼養地域，準集約的牛飼養地域，集約的牛飼養地域の3類型に区分された。続いて，岩手県内の各類型の牛飼養地域より，それぞれ岩泉町（肉用牛繁殖），滝沢村（酪農），前沢町（肉用牛肥育）の3町村が事例地域に選定された。これらの事例地域では，合計166戸の牛飼養農家を対象に，調査票を用いた面接調査が実施された。牛飼養農家の一連の飼料調達活動を詳細に分析することにより，牛飼養の発展に影響を与える飼料基盤の内容とその地域的展開が明らかとなった。本研究は，牛飼養農家による飼料の利用重量を可消化養分総量に換算する手法を用い，事例地域にかかわる飼料の生産・流通・消費を定量化した。

岩手県の3つの事例地域における牛飼養は，飼料給与構成に基づき，自給牧草依存型，飼料作物・配合飼料併用型，流通飼料依存型，濃厚飼料多給型の，4類型に区分された。岩泉町における日本短角種飼養では，自給牧草依存型の繁殖経営が基本類型をなした。滝沢村の酪農経営は，大規模な粗飼料生産に立脚した自給牧草依存型および飼料作物・配合飼料併用型と，流通飼料依存型とに分化していた。前沢町では，濃厚飼料多給型の黒毛和種肥育が発達していた。このように，特定の経営類型が農家の大勢を占めるための条件としては，各事例地域の利用可能な粗飼料生産基盤と，流通飼料供給基盤への近接性が指摘された。

本研究において解明された，牛飼養の地域分化を形成する飼料基盤の特性は，以下の4点に総括された。第1

は，飼料生産規模の拡大可能性であり，耕作不適地の存在，および農地の流動性と密接に関連している。第２は，飼料収穫・調製作業の機械化に対する，飼料畑や採草地の適応性である。それは，地形条件や農道の整備状況に影響される。第３は，水田の飼料用稲藁の供給力である。これは，水稲作農家の耕地経営規模や，コンバインの普及率に規定される。第４は，大規模な配合飼料供給基地による産地掌握の進展度である。配合飼料供給基地の勢力圏の拡大は，高速交通の整備と，養豚・養鶏の産地形成によって促される。

審査の結果の要旨

従来の地理学研究では，飼料基盤のうち，酪農家の自給飼料生産にかかわる部分のみが，酪農経営の地域差の因子として提示されたに過ぎなかった。本研究の評価は，第１に肉用牛飼養と酪農を初めて対置し，流通飼料の供給基盤まで含めて，牛飼養の地域分化と飼料基盤との規定的な関係を実証した点に与えられる。第２に，飼料の重量を養分量に換算する斬新な手法を用いて，飼料の生産・流通・消費を定量化し，個別地域の各種畜産に関する研究成果の統合を可能にした点が注目される。本研究は，遠隔地域においても，大都市近郊に類する牛飼養の資本集約化が進展するという事実を，飼料基盤の特性および技術的変化の地域差から説明し，わが国の畜産業研究に新たな知見を加えるものである。また，飼料基盤の観点から地域特性を解明した本研究は，畜産地理学の新しい分野を確立した。

よって，著者は博士（理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。